

富山県上市町

黒川上山古墓群発掘調査第10次調査概報

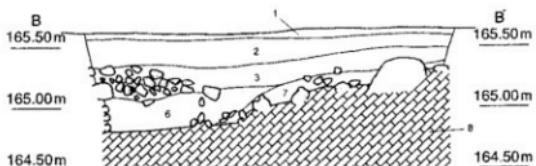
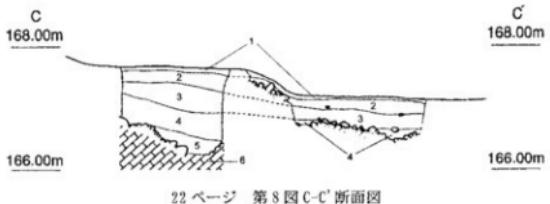
黒川岸天遺跡

2005年3月

上市町教育委員会

『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査第10次調査概報 黒川岸天遺跡』 正誤表

頁・項目	行・位置	誤	正
巻頭図版 1	キャプション	2. 第 10 レンチ	2. 第 11 レンチ
目次	第 11 図	露岩 32 実測図 (1)	露岩 32 実測図 (平面図)
"	第 12 図	露岩 32 実測図 (2)	露岩 32 実測図 (立面図)
2	キャプション	12. 稲村山城跡	13. 稲村山城跡
4	31	刈谷俊介氏	薗谷俊介氏
6	27	第 3 図～第 5 図、図版 4～図版 6	第 3 図～第 10 図、図版 2～図版 14
12	5	第 11 レンチ	第 6 レンチ
"	32	その範囲はその範囲は	その範囲は
14	左上付近	露岩 28	露岩 30
"	中央上付近	第 1 レンチ	第 11 レンチ
20	A-A' 断面図	土層番号抜け	上方から 1・2
"	土層注記	2: 崩落土 10YR3/3 暗褐色土	2: 10YR3/3 暗褐色土
22	C-C' 断面図	土層番号抜け	下図参照
24	B-B' 断面図	土層番号抜け	下図参照
26	キャプション	縮尺 1/800	縮尺 1/80
図版 11	キャプション	1: 平坦面 8 (南より)	1: 平坦面 8 (北より)
図版 12	キャプション	1: 平坦面 9-10 (南東より)	1: 平坦面 9-10 (南東より)
図版 13	キャプション	1: 第 1 レンチ全景 (北東より)	1: 第 11 レンチ全景 (北東より)



お手数をおかけしますが、上記事項の変更をよろしくお願ひいたします。

上市町教育委員会

富山県上市町

黒川上山古墓群発掘調査第10次調査概報

黒川岸天遺跡

2005年3月

上市町教育委員会



1.第9トレンチ 2.第10トレンチ



1



2

1.露岩32北面の加工痕 2.露岩32南面の加工痕

## 序

上市町では、平成6年に下水道管理用道路敷設に伴う発掘調査で、12世紀末から14世紀までの中世墳丘墓群を調査しました。この遺跡が黒川上山古墓群であり、完全な形で今に残る全国でも稀な遺跡であることが判明しました。町ではその重要性から道路の方線変更を行い、全面的に遺跡を保存し、同年12月には上市町指定史跡として後世に残すことにいたしました。

上市町教育委員会ではこの遺跡を次代に残すため保存整備をする予定ですが、その資料作成のための発掘調査を平成8年度より国庫補助を得て計画的に行っております。

前回までの調査で、黒川上山古墓群からは12世紀後半から15世紀に及ぶ埋葬施設67基が確認され、黒川塚跡東遺跡では古墓群よりやや古い6基の墳丘墓及び寺院あるいは僧坊跡と考えられる施設群、伝承真興寺跡では本格的な伽藍配置を有する山林寺院、日枝神社裏遺跡では僧坊跡と想定される遺構群、円念寺山遺跡では全国屈指の大規模経塚群というように、古代～中世の各種の宗教遺跡がこの黒川の地に密集していることが明らかになってきました。中でも円念寺山遺跡の経塚埋納品はその貴重さと重要性から全国的にも注目を集め、またその内容からは付近一帯が中世的一大霊場であったことがさらに明確になったばかりか、鶴岳・立山を中心とする広義の立山信仰にも関連する遺跡群であったという可能性が示されました。また、これらの調査に並行して実施してきた分布調査では、黒川地区から護摩堂地区にかけての谷沿いにはこの遺跡群と一緒にものとして捉えうる大小様々な平坦面群が濃密に分布していることが明らかとなり、一昨年度には護摩堂村巻遺跡・護摩堂曲戸遺跡の発掘調査を実施しました。調査では寺院あるいは僧坊跡と考えられる広大な平坦面群、大型の塚状地形を確認しています。

今年度の調査では、平成13年度の分布調査で確認し、昨年度に発掘調査を行なった「黒川岸天遺跡」の第2次調査を実施しました。昨年度調査では造成された平坦面や人為的な加工痕が多く残る巨岩などを確認しましたが、こうした人間活動が行なわれた時期を示す遺物は出土しませんでした。今年度の調査では少数ではありますが珠洲が出土し、この地の利用が中世にまで遡ることが明らかになりました。

調査は平成16年7月から平成17年3月にかけて実施しましたが、この間に掘り出された資料が上市町及び富山県の歴史を物語るよろととなれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり多大なご指導をいただきました文化庁文化財部記念物課、富山県文化財課、富山県埋蔵文化財センター、富山考古学会、黒川地区のみなさまに心より感謝申し上げます。

平成17年3月

上市町教育委員会

## 例　　言

1. 本書は富山県中新川郡上市町黒川<sup>くろかわ</sup>地内に所在する黒川岸天遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成16年7月27日から平成17年3月31日までの延べ49日間で実施した。
3. 調査対象面積は約5,000m<sup>2</sup>で、実際に掘削を行ったのはそのうち約245m<sup>2</sup>である。
4. 調査は、国庫補助金、県費補助金を得て上市町教育委員会が実施した。
5. 調査事務局は上市町教育委員会におき、調査期間中、文化庁文化財部記念物課、富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センターの指導を受けた。事務及び調査担当は、教育委員会事務局長代理・文化振興係長 高慶孝と同主事 三浦知徳がこれにあたり、教育委員会事務局長 水原寛文が総括した。
6. 遺物の整理、本書の編集・執筆は高慶・三浦が行った。遺物の実測・トレイスは調査担当が中心となり、後述する整理作業員が行った。
7. 調査期間中及び本書の作成にあたり、下記の方々から有意義なご指導・助言並びにご協力を頂いた。記して深甚なる謝意としたい。  
上市町黒川地区中世宗教遺跡群保護調査委員会委員各位、富山大学人文学部教授 黒崎直、橋本正春、南砺市教育委員会 岡田一広、永見市教育委員会 幸瀬直樹、黒川区長 伊藤勝保、笠野辰雄  
(順不同・敬称略)
8. 調査参加者は次のとおりである。  
発掘調査参加者：福沢佳典、岡野達（以上富山大学大学院生）、岡島恵子、尾上さやか、久慈美咲、小林高太、真田泰光、高橋彰則、徳井恵子、福崎祐介、福西磨衣、村上しおり、用田聖実（以上富山大学学生）、荒木智恵子、岩城秀子、大沢邦子、大沢徳雄、大沢富子、金子みつゑ、川上富美子、酒井栄子、酒井文子、澤井新三、甚内みき子、高城英子、高城富美子、早崎秋子、藤田一枝、松本純一、吉田江美子  
整理作業員：小林高太、高橋彰則、水谷圭吾（以上富山大学学生）、城戸幾久子、甚内みき子

# 目 次

## 卷頭図版

### 序

### 例 言

### 目 次

I 遺跡の環境 .....	1
II 調査に至る経過 .....	1
III 調査の経過 .....	3
IV 調査結果 .....	6
1. 遺構 .....	6
2. 遺物 .....	12
V まとめ .....	12
引用・参考文献 .....	13

## 挿 図

第1図 地形と周辺の遺跡 (1/50,000) .....	2
第2図 遺跡周辺図 (1/5000) .....	5
第3図 遺構全休図 (1/500) .....	14
第4図 今年度調査区全体図 (1/250).....	16
第5図 第4・5トレンチ実測図 (1/80) .....	18
第6図 第6トレンチ実測図 (1/80) .....	20
第7図 第7トレンチ実測図 (1/80) .....	21
第8図 第8・9トレンチ実測図 (1/80) .....	22
第9図 第10トレンチ実測図 (1/80) .....	23
第10図 第11トレンチ実測図 (1/40) .....	24
第11図 露岩32実測図(1) (1/80) .....	25
第12図 露岩32実測図(2) (1/80) .....	26
第13図 遺物実測図 (1/2).....	28

## 写真図版

図版1 周辺航空写真	
図版2 遺構写真 (遺跡遠景、平坦面3)	
図版3 遺構写真 (第4トレンチ)	
図版4 遺構写真 (第4トレンチ)	
図版5 遺構写真 (第5トレンチ、露岩19・20)	
図版6 遺構写真 (平坦面4、露岩18、第6トレンチ)	
図版7 遺構写真 (平坦面5、第7トレンチ)	
図版8 遺構写真 (平坦面6・7、露岩22・23)	
図版9 遺構写真 (第8トレンチ)	
図版10 遺構写真 (第9トレンチ)	
図版11 遺構写真 (平坦面8、第10トレンチ)	
図版12 遺構写真 (平坦面9・10、露岩27)	
図版13 遺構写真 (第11トレンチ)	
図版14 遺構写真 (第11トレンチ)	
図版15 遺構写真 (露岩32)	
図版16 遺構写真 (露岩32)	
図版17 遺構写真 (露岩32)	
図版18 遺構写真 (露岩32)	
図版19 遺構写真 (調査風景、開谷・五位尾地区)	
図版20 遺物写真	

## I 遺跡の環境

上市町黒川岸天遺跡は、富山県中新川郡上市町黒川地内に所在する（第1図・第2図・図版1）。上市町は富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する早月川、上市川、白岩川に沿って東南から北西にのびる町である。西は県都富山市、北は滑川市、南は立山町に接し、東側は標高2,999mの剣岳をはじめとする北アルプスの山々が連なる。黒川岸天遺跡は、平成13年度に実施した分布調査で発見した遺跡である。全国名水百選にも選定された「穴の谷露水」で広く知られる黒川地区の東端山中に位置し、平成15年度に調査を実施した弘法大師ゆかりの地・護摩堂地区との境界にあたる。遺跡は標高約150～200mの山腹に立地し、林立する巨岩群とそれらの間に広がる平坦面群からなる。これらの巨岩群は概ね指先大の流紋岩・安山岩等を取り込んだ軟質の角砾凝灰岩からなり、中新世中期の海成層である八尾累層中位の福平火砕岩層に由来するものと考えられる。なお、本遺跡の立地する山地もこの層と考えられる岩石で形成されているようで、山中の所々で確認できる露頭では風雨にさらされて滑らかになった岩肌を覗かせている。

遺跡直下の沢沿いにはかつては黒川～護摩堂を結ぶ往來であった古道があり、「弘法大師の足跡岩」と称される岩が置かれた開削面もある。また地元の方々の話によると、この辺りに数多く認められる巨人な露岩群の一部は、古くより「仏岩（ほとけいわ）」と呼びならわされていたとのことである。こうした伝承は、この地が黒川地区の中世宗教遺跡群（経塚・墓・寺院・僧坊等）と密接に関わる、あるいは一体のものであったことを推測させる。

町内及び周辺の古代から中近世に至る宗教関係遺跡としては、市街地の東に真言宗大岩山日石寺がある。この寺院は北陸有数の真言寺院で、開基は奈良時代まで遡るといわれ、本尊は磨崖佛の不動明王（国指定重要文化財）である。その裏山の京ヶ峰山頂には銅板製經筒及び外容器（珠洲巻）、銅鏡などが出土した大岩京ヶ峰經塚（12世紀後半）がある。また、市街地の東には青洞宗の眼目山立山寺、南の立山町には日中正橋經塚、日中東經塚がある。これら中世宗教遺跡のバックボーンをなすのが、文献上古代から中世に登場する堀江保・小森保あるいは堀江社に関連するとみられる遺跡（江上B遺跡・東江上遺跡・上梅沢町遺跡・本江馬場田遺跡・横越遺跡など）、南北朝期から戦国時代まで中新川一帯に勢力をもつた土肥氏をはじめとする豪族の城や居館跡（護摩堂城跡・福村城跡・郷柿沢館跡・柿沢城跡・茗荷谷山城跡・郷田砦・弓庄城跡・千石山城跡・有金城跡・堀江城跡・堀の内城跡など）であり、これらの遺跡との関わりの中でその消長があったものと考えたい。このことから、平野部の遺跡との関連、山間部の城や寺院との関連も十分視野に入れると共に、密教における山岳信仰のあり方を十分に考慮に入れた調査が必要であり、中新川地区全体の中世遺跡の詳細な検討が必要である。

## II 調査に至る経過

上市町黒川地内では、平成5年度に農業集落排水事業の管理用道路が計画され、当該地区に所在する上山古墓群の、事前発掘調査が行われた。調査の結果、本遺跡が全國でも少ない中世墳丘墓群で、墓数も40基を上回るきわめて良好な遺跡であることが明らかとなった。上市町教育委員会は上級機関の指導のもと、県文化財保護審議委員濱辰氏（故人）・奈良大学学長（当時）水野正好氏に現地視察をお願いし、保存に関する意見をいただいた。この意見を元に、町当局と再度協議、地元黒川地区からの保存要請もあり、全面保存で合意した。その後同地内は平成6年12月8日町指定史跡として指定され、平成7年度には公有地化も図られた。平成8年度から国庫補助金・県費補助金を得て黒川上山古墓群の保存と一般公開のための資料収集を目的とする周辺調査を行っており、今年度で第10次調査となる。



第1図 地形と周辺の遺跡（縮尺 1/50,000）

- 1.黒川岸天讃跡, 2.黒川上山古墓群, 3.黒川塚跡東遺跡, 4.伝承真與寺跡, 5.日枝神社裏遺跡, 6.黒川円念寺山遺跡, 7.護摩堂曲戸遺跡, 8.護摩堂村巻遺跡, 9.護摩堂城跡, 10.広野D遺跡, 11.広野C遺跡, 12.眼目山田開山堂遺跡, 12.稚村山城跡, 14.大岩日石寺磨崖佛, 15.大岩京ヶ峰経塚, 16.郡柿沢館跡, 17.湯崎野西遺跡, 18.湯神子B遺跡, 19.柿沢城跡, 20.若荷谷山城跡, 21.郷田砦跡, 22.馬庄城跡, 23.日中玉橋経塚, 24.日中東経塚, 25.横越遺跡, 26.若杉神田遺跡, 27.中小泉東遺跡, 28.石仏遺跡, 29.石仏町道跡, 30.石仏南遺跡, 31.大水田西遺跡, 32.江上B遺跡, 33.上梅沢町遺跡, 34.上梅沢遺跡, 35.有金城跡, 36.堀江城跡, 37.本江馬場田遺跡, 38.金助山砦跡, 39.小森館跡, 40.堀の内城跡, 41.木尾南城跡

### III 調査の経過

#### 第1次調査(平成6年度本調査) 黒川上山古墓群

調査期間：平成6年5月13日から同年7月27日（延べ72日間）。調査対象：1,500m<sup>2</sup>。遺構：墳丘墓19基など。遺物：珠洲藏骨器、土師質皿など。年代：13世紀代。その他：調査地区以外の部分においても16基以上の墳丘が視認され、全体で39基以上の墳墓が存在していることが明らかとなった。

#### 平成6年度試掘調査 黒川塚跡東遺跡

調査期間：平成6年9月9日から9月22日（延べ11日間）。対象対象：古墓群東側の山林約5,000m<sup>2</sup>。道路方線の変更に伴う事前の試掘調査。その他：県補助金を受けて実施した。

#### 第2次調査(平成8年度本調査) 黒川上山古墓群

調査期間：平成8年11月7日から同年12月17日（延べ25日間）。調査対象：約1,500m<sup>2</sup>。遺構：墳丘・集石・五輪塔など45カ所の星葬施設。遺物：珠洲焼の藏骨器・輸入磁器・土師質皿・五輪塔6カ所。その他：1次調査を含め全体で70カ所の埋葬施設を持つ墓群であることが明らかとなった。

#### 第3次調査(平成9年度本調査) 黒川塚跡東遺跡

調査期間：平成9年8月21日から同年10月7日（延べ32日間）。調査対象：古墓群東側平坦面、約5,500m<sup>2</sup>。遺構：墳丘墓6基、平坦面10、獨立柱建物1、石列1、礎石跡5、石垣遺構1カ所、参道ないし墓道1カ所。遺物：8世紀から12世紀までの須恵器片多数、繩紋土器、攻玉製品など。

#### 第4次調査(平成10年度本調査) 伝承 真興寺跡

調査期間：平成10年10月8日から同年12月28日（延べ33日間）。調査対象：IH真興寺跡と伝承のある平坦面約3,200m<sup>2</sup>。遺構：本堂跡・塔跡・堂跡などの基壇・礎石・盛土状造構・池・石敷・山門の石段と石垣・湧水地・横穴など。遺物：土師質皿・須恵器・珠洲焼・越中瀬戸・唐津など。年代：9世紀から18世紀。その他：黒川地区山中の分布調査を行い、大小様々な平坦面を確認した。

#### 第5次調査(平成11年度本調査) 伝承 真興寺跡

調査期間：平成11年9月27日から平成12年3月31日（延べ89日間）。調査対象：真興寺跡の周辺調査、本堂及びその周辺調査。その他：周辺と閑谷地区の分布調査及び簡易測量を実施した。

#### 第6次調査(平成12年度本調査) 日枝神社裏遺跡・円念寺山遺跡

調査期間：平成12年6月12日から平成13年3月31日（延べ56日間）。調査対象：日枝神社裏の平坦面及び字名、舟ノ谷（円念寺山と呼ばれる）の試掘調査1,500m<sup>2</sup>。遺構：造成平坦面・土壤・集石など。遺物：珠洲・土師質皿・短刀など。その他：穴の谷靈場周辺の分布調査・簡易測量を実施。

#### 第7次調査(平成13年度本調査) 円念寺山遺跡

調査期間：平成13年6月12日から平成14年3月31日（延べ60日間）。調査対象：黒川字舟ノ谷約2,000m<sup>2</sup>。遺構：石桶1、集石1、經塚23カ所、塚14カ所。遺物：珠洲（經筒外容器）、青白磁、独鉢杵・磬・短刀など金属製品。その他：護摩堂周辺地区分布調査及び簡易測量実施。

#### 第8次調査(平成14年度本調査) 護摩堂村巻遺跡・護摩堂曲戸遺跡

調査期間：平成14年7月4日から平成15年3月31日（延べ69日間）。調査対象：護摩堂字村巻及び曲戸の試掘調査約14,000m<sup>2</sup>。遺構：平坦面・土壘・石壘状集石・集石・通路跡等。遺物：珠洲・越中瀬戸・唐津・伊万里。その他：片地谷周辺地区分布調査実施。

## 第9次調査（平成15年度本調査）黒川岸天遺跡

調査期間：平成15年8月19日から平成16年3月31日（延べ56日間）。調査対象：黒川字岸天地内約8,000m<sup>2</sup>。遺構：平坦面、露岩、集石、石屋等。遺物：二次加工痕のある石材。その他：西種周辺地区分布調査実施。

## 第10次調査（平成16年度本調査）黒川岸天遺跡

調査期間：平成16年7月27日から平成17年3月31日（延べ49日間）。調査対象：黒川字岸天地内約5,000m<sup>2</sup>。遺構：平坦面、壇状遺構、露岩、集石。遺物：珠説、磁器、越中瀬戸。

## 黒川地区中世宗教遺跡群保護調査委員会

平成14年11月8日、今後の調査や保存・活用の方針を探るため「黒川地区中世宗教遺跡群保護調査委員会」を発足した。組織は以下の通りである。

委員長：小島俊彰（金沢美術工芸大学教授・富山考古学会会長・考古）、副委員長：久保尚文（富山大学講師・歴史・文献）、委員：宁野隆夫（国際日本文化研究センター教授・考古）・岸本雅敏（富山県埋蔵文化財センター所長・考古）・久保智康（京都国立博物館学芸部工芸室長・考古・美術）・西井龍儀（富山考古学会副会長・考古）・福江充（富山県立山博物館学芸員・歴史）・山岸常人（京都大学大学院工学研究科助教授・建築）、アドバイザー：伊藤清江〔～平成15年7月〕・舟崎邦雄〔平成15年7月～〕（富山県教育委員会文化財課課長・行政）・坂井秀弥（文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官・行政）、顧問：水野正好（奈良大学文学部教授・考古）、事務局：上市町教育委員会事務局文化振興係（発足時：上市町教育委員会生涯学習課）

## 黒川フェスティバル

平成13年度より本遺跡群の周知と活用をはかる事業として、「黒川フェスティバルー中世の里、黒川郷を行くー」と題したイベントを年1回実施している。主催は地元黒川地区町内会・穴の谷弘真会・上市町・上市町教育委員会・町観光協会で構成される実行委員会で、富山県教育委員会・富山考古学会・中新川郡教育会の後援を受けている。今年度で第4回目を迎え、町内でも秋の恒例行事として定着している。内容は下記のとおりである。

### 平成13年10月14日 第1回黒川フェスティバル（参加者約1,000人）

歴史講演：奈良大学教授 水野正好氏「中世の里、黒川郷を行く」、史跡見学会：黒川良安顕彰碑・穴の谷靈場・黒川上山古墓群・伝承真興寺跡・遺物展示：黒川上山古墓群・伝承真興寺跡・円念寺山遺跡

### 平成14年10月13日 第2回黒川フェスティバル（参加者約800人）

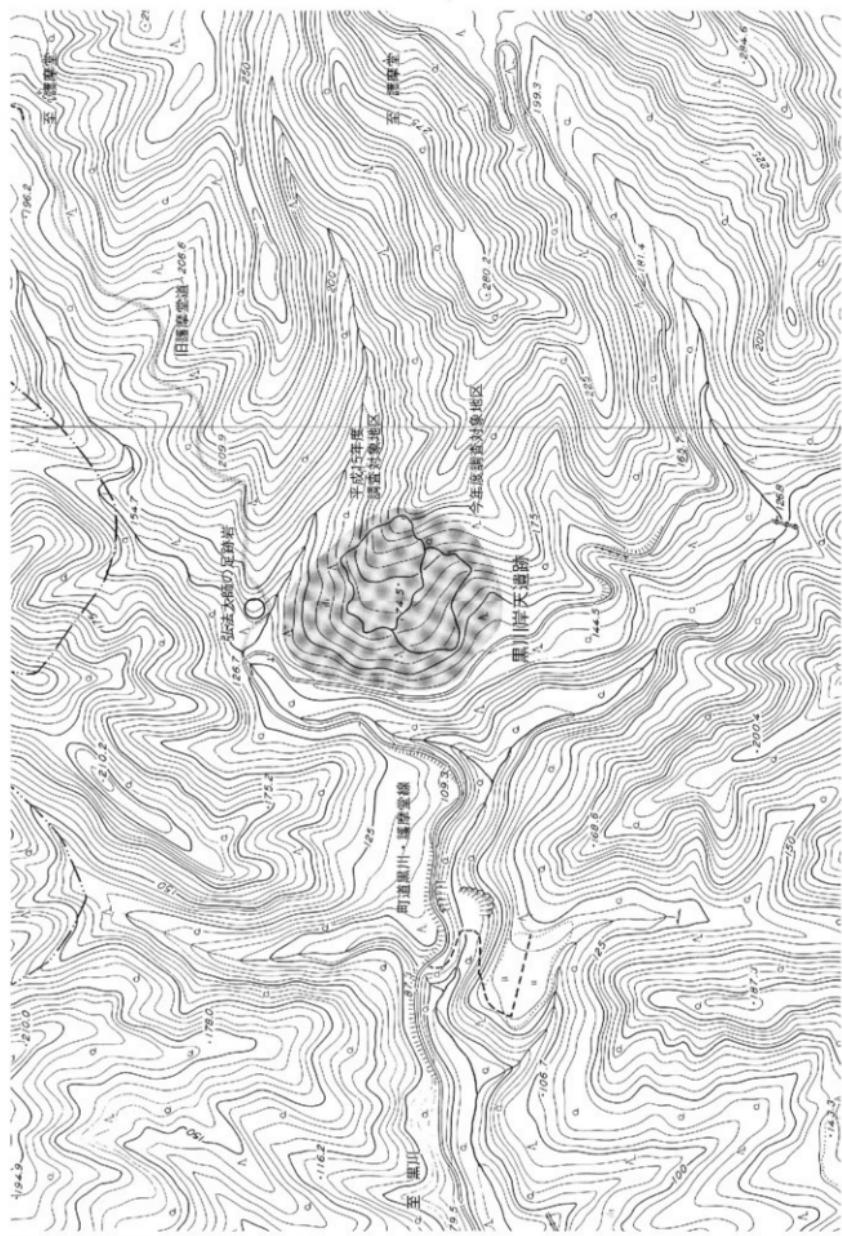
歴史講演：国立歴史民俗博物館助手 村木二郎氏「柳樂往生と絆縫」、史跡見学会：円念寺山遺跡・黒川上山古墓群・穴の谷靈場・黒川良安顕彰碑・遺物展示：黒川上山古墓群・伝承真興寺跡・円念寺山遺跡

### 平成15年10月12日 第3回黒川フェスティバル（参加者約1,200人）

歴史講演：俳優・日本考古学协会会员 割谷俊介氏「遺跡を旅する」、史跡見学会：黒川良安顕彰碑・穴の谷靈場・黒川上山古墓群・円念寺山遺跡・黒川良安墓碑・遺物展示：黒川上山古墓群・伝承真興寺跡・円念寺山遺跡

### 平成16年10月24日 第4回黒川フェスティバル（参加者約1,000人）

歴史講演：富山県立山博物館館長 米原寛氏「立山に向かう心象（こころのかたち）」、史跡見学会：黒川良安顕彰碑・穴の谷靈場・黒川上山古墓群・円念寺山遺跡・黒川良安墓碑・遺物展示：黒川上山古墓群・伝承真興寺跡・円念寺山遺跡



第2図 遺跡周辺図 (縮尺 1/5,000)

## V 調査結果

黒川岸天遺跡は、平成13年度に実施した分布調査で確認した平坦面18にあたり、標高約150～200mの山腹に立地する。遺跡は林立する巨岩群（以下「露岩」）とそれらの間に広がる平坦面群、そして斜面に開口する岩屋からなり、その範囲はおよそ30,000m<sup>2</sup>に及ぶものと推定される。一帯は杉の植林が行われているが、雑木・下草の繁茂や倒木などが著しい。なお、地権者の方々の話によると、この地は植林以前には一部が茅場として利用されていたとのことであるが、その他の土地利用のあり方については不明である。

昨年度（平成15年度）の調査では、本遺跡の最高所付近の約8,000m<sup>2</sup>を対象に下草・倒木・雑木の除去を行い、地形の確認を行った（第3図参照）。調査対象地区のほぼ中央に位置する露岩1を境に西側では平坦面が広がるが、反対の東側においては多くの露岩による凹凸の激しい地形があり、その背後の斜面には岩屋が開口する。また岩屋背後の斜面にも露岩群があり、そこを上り詰めると山地を形成する岩体が露出している。

平坦面の調査では造成された可能性のある平坦面、集石群、地山の削り出しによって形成された長円形の墳丘状遺構など、多くの人為的な地形改変の状況を確認した。露岩群の調査では、露岩2～10について表土の除去を行って岩面の状態を確認し、そのうち露岩3について明瞭な人為的加工痕が集中していることを確認した。また岩屋の調査では、内部の空間が予想よりも狭いものであることが判明した。ただし溝状の地形、岩面に残る加工痕などから人の手が加えられていることが窺われた。

しかしながら、建物跡や土壙などのような明確な遺構がなく、また表土中より近世以降の陶磁器片が2点出土した以外は明確な遺物がなかったことから、本遺跡における人間活動の内容やその時期については不明であった。このため、2次調査となる今回の調査では対象範囲を広げ、遺構・遺物の探索を行なうことに主眼を置いた。以下にその概略を述べる。

### 1. 遺構（第3図～第12図、図版2～図版19）

今年度の調査は、昨年度調査区の南側に林立する露岩の間に存在する比較的小規模な平坦面對象にして行なった（第3・4図）。その範囲はその範囲は世界測地系の平面直角座標X 79740～79810、Y 22500～22600にあたり、面積は約5,000m<sup>2</sup>を測る。なお、平坦面・露岩・トレンチの番号は、昨年度調査時のものに追加して付した。これにより、今年度調査区にかかる平坦面は3～12、露岩は17～33、トレンチは4～11となる。

#### A. 平坦面（第3図～第5図、図版4～図版6）

##### 平坦面3（第3～5図、図版2～5）

平坦面3は、この山地の本体を構成する岩体の一部と考えられる露岩17と露岩19に挟まれた空間に位置する平坦面である。北方では昨年度調査対象地区的平坦面2の延長から緩斜面を介してつながり、南方では平坦面4・露岩18に向かって落ち込むように開口する。中央部付近では標高約169mでほぼ水平である。現状で「平坦面」として認識できるのは南北約15m、東西約10mほどの不定形の範囲であるが、北～東にかけては山地斜面部からの流土の堆積があるため、本来はもう一回り広いものであったものと考えられる。

今回の調査では、露岩17から露岩19にかけてこの平坦面3を東西に横断するように第4トレンチ、その南方で小規模な段状を呈する部分に第5トレンチを設定し、遺構・遺物の検出を試みた（第5図）。いずれも5cmほどの表土下に汚れたような印象を受ける暗褐色土（2層）が厚く堆積し、その下に黒褐色土の暗色带（3層）が存在する。深掘りを行った第4トレンチ中央部では、3層の下位に2層と類似した土層（4層）を介在してより明るい5層・6層と続き、地山（15層）へと至る。この地山面の標高は約166.5mで、地表面からは約2.2mの深さとなる。地山面はトレ

ンチ東側では標高約170m前後で高く、未掘部分で中央部に向けて大きく落ち込んでいるものと想定される。この東側地山面から中央部の3層とは比較的緩やかに面的につながり、かつて一連の面を構成していた可能性がある。また3層は土壌化の作用を受けて暗色化したものと考えられ、この東側地山面～3層上面が遺構面であった可能性が高い。ただし、これらのトレンチでは土量と日数の都合上3層を面的には検出してはおらず、遺構の有無は確認できていない。しかし、サブトレンチや深掘り区の掘り下げの際には他の土層も含め遺構や遺物はまったく見つかっておらず、また東側と中央部の比高差も大きいことから、中央部付近の遺構面（本来の3層上面）そのものがすでに流失している可能性が高いものと判断した。

第5トレンチでは、地表面で観察できた小規模な段地形が、2層によって形成されていることが明らかとなった。遺構面と推定した3層はこの地形には関与しておらず、この段地形はより後出的なものと考えた。

#### 平坦面4（第3・4・6図、図版6）

平坦面4は、平垣面3の南下方に位置する狭小な平坦面である。標高は約165mで、平垣面3との比高差は4mほどである。意図的に造成された平坦面というよりは上方からの流土が露岩18によって堰き止められた結果形成されたものであると考えた。なお、調査の後半になって、平坦面3・4間の斜面部表土中より珠洲を2点採取した（第13図2・3）。上方に位置する平坦面3からの流れ込みであろうと推定され、これら以外にも遺物が存在するものと考えて斜面部から平坦面4にかけて第6トレンチを設定した（第6図）。その結果、表土直下より1点の磁器（第13図4）、2層に食い込む形で1点の珠洲（同1）が出土した。いずれも平坦面3からの流れ込みと判断でき、今回の調査では確認し得なかった何らかの人間活動が平坦面3において行なわれていたことを示すものであると考えた。

#### 平坦面5（第3・4・7図、図版7）

平坦面4は、露岩19と露岩21との間に位置する平坦面である。南北18mほどの細長い平坦面で、北半では幅約5mほどと狭いが、南方では約10mほどに広がる。北方では後述する平坦面6と明確な段によって区画されている。標高は170m前後で、ほとんど傾斜のないほぼ水平な面である。この平坦面5を東西に横断するように、露岩19から露岩21にかけて第7トレンチを設定した（第7図）。トレンチ東側（露岩19側）では、表土下に流土と考えられる2層・14層を介在してすぐに平坦な地山（15層）が現れたが、中央部付近から西側（露岩21側）にかけて急激に落ち込んでいる様子が観察された。その断面は、地山の傾斜面と露岩21によってV字形の谷地形となる。トレンチが狭く最深部までの掘り下げはできなかったが、現状での深さは地表面から約1.8mを測る。

この谷地形は露岩21が西方向にずれることによって形成された可能性が高く、露岩に沿うように南北に走っているものと推定されるが、今回の調査では確認していない。この谷地形の頂上は比較的細かい単位での分層が可能で、相対的に暗／明が互層状に繰り返されている。また、3層上面は東側の地山面とは同一のレベルで、その土質も地山に近いものであることから、ある時点で形成されたV字形の谷地形を人為的に埋め、上面に3層を敷いて1面の平坦面を造成したものであると考えた。なお、この平坦面上では柱穴等の遺構は確認できず、また出土遺物もないことから造成の意図及び時期については不明である。

#### 平坦面6（第3・4・8図、図版8・9）

平坦面6は、露岩21の北で平坦面5から一段下がった位置にある平坦面である。南北約10m、東西約6mのほぼ長方形を呈するが、北～東にかけて平坦面2に由来する流土により輪郭が不明瞭となっている。東側の斜面には長径5mほどの塊状の集石が認められるが、表土中～上にかけて存在し、比較的新しい時期に寄せ集められたものである。ここでは、露岩21から平坦面6にかけて第8トレンチを設定した（第8図）。その結果、現状での平坦な面は表土下の2層によるもので、その下の3層は一段低い平坦面7方向（西）へ向けて傾斜していることが明らかとなつた。平坦面を形成する2層上面では遺構は検出されなかつたが、北側・東側で土層観察用のサブトレンチを設定し

て掘り下げたところ、北東隅部分において7層中より集石を検出した。露岩とは異なる硬質の角礫が多く、また明確な分布範囲を持っていることから、人為的なものである可能性が高い。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

#### 平坦面7（第3・4・8図、図版8・10）

平坦面7は、平坦面6の西側下方に広がる平坦面である。中央部分は標高約167mで水平であるが、北側ではやや高くなり、緩いスロープ状となって露岩23に沿うように西側に屈折する。平坦面6との境界は比高差40cmほどの南北に伸びる直線的な段をなし、一部に礫が露出している。また、西側より下方に位置する平坦面8との境界部分も明瞭な段地形をなすが、一部通路状に開口している。平坦面上には大小の集石が所々に認められるが、平坦面6のものと同様、後世に寄せ集められたものようである。しかし、ピンボールによる探査では地中から立ち上がる集石も一部に認められ、古いものも含まれているようである。

平坦面7と平坦面6とがなす段地形を取り込むように、第9トレンチを設定して掘り下げた（第8図）。1～4層は隣接する第8トレンチと共に、この段地形も平坦面6と同様に2層によって形成されている。また第8トレンチで西側に傾斜していた3層はそのままながらに平坦面7へと至る。段地形の斜面部では当初より一部の礫が表出しており石列・貼石状の構造が想定されていたが、実際に検出してみると帶状の集石であった。拳大～30cm大の硬質の角礫が幅60cmほどの範囲に乱雑に集められ、現状ではその配置に規則性は認められない。この集石は概ね2層中に含まれ、段地形の構造の際に土留めとして施されたものと考えた。なお、この斜面部では未掘部分においても礫の存在を確認している。

トレンチ西側（平坦面7側）では、4層中から立ち上がる集石を検出した。この集石は中央部付近の30cm大の礫以外は拳大～15cm大の硬質礫からなるが、より下位に位置する礫及び周辺に広がる小型の礫には露岩と同質の軟質礫が多い。トレンチ東側（平坦面6側）で確認した地山ではこの種の礫を多く含むことから、これらの軟質礫は地山に包含された礫の部分的な浮き上がりの可能性があり、この上に硬質礫による集石が施されたものであろう。なおこの集石は2層中に包含される斜面部の集石とは連続せず、また間層（3層）を挟むことから、時期的に異なるものと考えた。本トレンチからは遺物が出土しておらず詳細は不明であるが、第6トレンチ出土遺物の様相から考えると、下層の集石を中世、上層の土留め状の集石を近世以降として捉えることも可能かもしれない。

#### 平坦面8（第3・4・9図、図版11）

平坦面8は平坦面7の西側に一段低く広がる平坦面である。露岩21・24間から露岩23・25間に至る範囲で、長さは約20m、幅は狭いところで約3m、広いところで約8mを測る。標高は約166.5mではほぼ水平で、北端では露岩23・25間に平坦面9・10へと至る通路状のスロープがあり、南端では露岩21・24間から谷に向かって落ち込む。ここでは、露岩21から露岩24にかけて平坦面を東西に横断するように第10トレンチを設定した（第9図）。掘り下げてみたところ、トレンチ中央部において地山面が溝状に溝んでいる様子を確認した。この部分は何らかの改変を受けた様子はなく、自然地形であるものと想定される。この地形を埋める土層を観察すると、最下層の9層では大小の礫を多く含み、6層・7層を挟んで堆積する5層は他の層と比較して圧倒的に暗く最深部付近では炭化物片や小礫を多量に含んでいる。この5層は比較的長期間にわたって地表面であった可能性が高い。また北壁と南壁の土層を比較すると対応する層位はいずれも南壁側（谷側）が低くなっている。雨天時にはここを水が流れていたものと想定され、5層中の炭化物片や小礫はその營力によって運ばれてきたものと考えられる。なお、これらの土層を覆い現在の平坦面を形成している3層については、第7トレンチにおける流土の2層とほぼ同一であり、最終的にこの溝地形を埋めた流土である可能性が高い。

なおトレンチの掘削に伴うものではないが、平坦面南端の谷へ向かう斜面部において、越中瀬戸の碗を1点地表面で採取した。平坦面上から流れたものと推定され、のことから近世段階にはこの溝地形が埋まり現在のような平坦

な地形となっていた可能性が高い。

#### 平坦面9（第3・4・10図、図版12～14）

平坦面9は、昨年度調査区の平坦面2から西側に降りる斜面に台状に突き出た平坦面である。土砂の流出により輪郭がはっきりしないものの、現状では上面約10m×10mの方形に近く、標高は165.6mほどで一定である。ここでは第11トレントを設定し、遺構・遺物の検出を試みた（第10図）。その結果、トレント北東側が他の部分よりも一段低くなっている状況が確認された。周辺地形の状況からはむしろその他の部分が一段高くなっているものと捉えられる。今回の調査ではこの地形の全体像を明らかにすることはできなかったが、確認できた範囲では、例えるならば前方後方墳の「くびれ部」のような地形と言える。後方部にあたる部分の斜面には5～10cm大の硬質・軟質礫がびっしりと葺かれたように密集している。この葺石状の部分については、当初地山包含礫の表出という可能性を想定したが、礫の密集範囲が斜面部に限定され下方の平坦面では見受けられることなどから、人為的なものと判断した。

調査範囲が狭く現状では不明な点が多いが、ここでは上層の堆積状況及び混入物の観察から、以下のような状況を想定した（第10図模式図参照）。

- ①地山の削り出し及び盛土（7層）によって現状よりも高い壇状の地形が構築された。斜面部には5～10cm大の礫が葺石状に貼られていたようである。なお、この壇状地形は土橋状の高まりによって平坦面2の西側斜面部に連結されていた可能性がある。
- ②遺構放棄後、壇状地形上部の崩壊及び東側斜面からの流土によって5層・6層が堆積した。これらの上層は暗色化しており、比較的の長期間にわたって地表面であった可能性が高い。なお、トレント東側では6層の上面に乗るかたちで集石がなされていた。この集石を構成する礫の人さや質は壇状地形斜面部の葺石状集石のものと近く、遺構崩壊後に散乱していたものが集められたものと考えられる。
- ③壇状地形残存部の上面が削平され、4層が堆積した。ここで「削平」と考えたのは、4層中には細かく碎かれたような形状を呈する「礫片」が多量に含まれていたことによる。なお、②で触れた6層に乗る集石はこの時点のものである可能性がある。
- ④これまでの過程ではほぼ平坦となった面上に東側斜面部から土砂が流れ込み、2層・3層が堆積した。これにより、現状で認められるほぼ水平な地形が形成された。

なお、本トレント及びその周辺からは遺物は出土しておらず、遺構の性格や構築時期については不明である。ただし、本遺構が以上で想定したような壇状地形であったとするならば、単なる生活痕跡や石切開施設であったものとは考えにくく、何らかの宗教施設が上部に存在していた、あるいはこの地形そのものが塚のようなものであった可能性は高いものと考える。その場合、第6トレントで出土した珠洲の存在から、中世における黒川・護摩堂地区の宗教遺跡群との関わりが想定されることになろう。

#### 平坦面10（第3・4図、図版12）

平坦面10は、露岩24と平坦面9の間に広がる平坦面で、その範囲は15m×15mほどを測り今年度調査区の中で最も広いものである。標高は164.3mほどではほぼ水平であるが、北側は平坦面9からの流土でやや高くなっている。本平坦面については今回の調査では掘削を行っておらず地下の様相は不明であるが、雨天時には水が溜まりやすく、現状では比較的軟弱な地盤となっている。しかし空間としては広く使え、かつて何らかの施設が存在した可能性はあるものと考える。

#### 平坦面11（第3・4図）

平坦面11は平坦面10の西側に露岩28・29による段を介して広がる平坦面である。西側には露岩30・31があり、そこからは急激に落ち込む。なお、10mほど下方の図示範囲外にも平坦面が広る。現状では長さ20mほどの細長い平坦面

で、標高は161.8m前後である。この平坦面についても今回は掘削を行っておらず、詳細は不明である。

#### 平坦面12（第3・4図）

平坦面12は、露岩24・33の間に位置する平坦面である。現状で平坦面として認識しうる範囲は狭小であるが、露岩33の東側から露岩24・21の南下方にかけて緩斜面を介していくつかの平坦面が連続している。しかしこの範囲については倒木や雜木、下草の処理を行なっておらず現状では不明である。

#### B. 露岩

昨年度の調査においては、調査区内に存在する露岩についてできる限り覆土を除去してその形状・表面状態の把握に努めたが、今年度は平坦面の調査に主眼を置いたため、露岩32を除いては同様の作業はほとんど行なわなかった。

今年度調査区内の露岩は先に述べたとおり17~33と番号を振った。後述する露岩32を除くもののうち、現況の観察から不自然な点が見受けられたのは、露岩19・21・22・27・30の5つである。露岩19・21・22は周辺に割れた石材が散布したり不自然な割れが認められ、露岩27・30では現状で明確な岩面の窪みや加工痕の一部が確認できる。これらはいずれも昨年度の露岩3や後述する露岩32のような状況であるものと想定されるが、検出作業を行なっていないため詳細は不明である。

#### 露岩32（第3・4・11・12図、図版15~18）

露岩32は、今年度調査対象地区的西端に位置する。ここは当初調査予定地に入れていなかった場所であり、雜木や下草の繁茂で露岩の存在そのものが把握されていなかった。しかし、9月に本州に上陸して各地に甚大な被害をもたらした台風18号により、本露岩上部に根を張っていた杉が根こそぎ倒れ、巨大な露岩の存在が明らかとなった。また、露出した部分に明確な人為的加工痕が存在することが確認され、急速検出作業を行うことにしたものである。

露岩は、長さ10m、幅9m、高さ6mの比較的大型のものである。西側及び北側は山地斜面に食い込み、南側・東側では平坦面に乗るかたちとなる。なお、南側1/4ほどは地震等の影響によるものか、割れて分離している。ここでは説明の都合上北側の部分を「本体」、南側の部分を「分離部」と呼ぶ。人為的加工痕は北面・東面・南面の3面に存在し、それぞれに様相が異なる。

北面の加工痕（図版16）は、昨年度調査において検出した露岩3で見られた「円筒形に切り貫いたもの」が原形をとどめないものも含め7ヶ所、「方形に剥ぎ取ったもの」が1ヶ所確認できた。北側面西半部では円筒形4・方形1が重複してはっきりしないが、方形→上方の円筒→下方の円筒という作業順序が読み取れる。一方東半部では円筒形の加工痕が露岩の縁に沿って3ヶ所規則正しく配置され、その切り合いで上方（西）→下方（東）という作業順序が明瞭である。また東端の加工痕には切り出し対象物と思しき円筒形の石材が残置されており、この順序を裏付けている。なおこの円筒形石材は、現在北側を向いている側面が若干内湾している。これはおそらく中央における切り出し作業によって形成された加工痕の側面であろう。そしてこの面が現状では90度以上もずれていることからすると、円筒形石材の切り出し工程の最終段階では、この切り出し対象物をひねる、あるいはねじるといった工程が存在した可能性を示しているものと考えられ、興味深い。なお、これらの加工痕の大きさは、方形のものがおよそ90cm×90cmと露岩3で見られたものに近い。また円筒形のものはいずれも直徑約1mで露岩3のものと比較すると一回り大きいが、本露岩中に關してはほぼ統一的な規格であるものと言える。

西面の加工痕（図版17）については、他の2面に比べて遺存状態が悪く、判断のつかない部分が多い。露岩本体では岩面に大きな凹みが認められるが、その大部分は風雨によって磨滅し、現状で明確な加工痕としては下底部に圓角く切り出した痕跡が2ヶ所残るのみである。この部分では奥行きが約60cmあり、上部の様相と合わせて考えると圓柱状の石材の剥ぎ取りが方向を変えて重複しているようである。南側の分離部ではほぼ全面にわたって工具痕が確認できるが、明確なものとしては110cm×20cmほどの長方形の石材を切り出そうとした痕跡と、径1mほどの碗状に切り貫

いた痕跡とがある。このうち前者では、作業途中で上部1/4ほどが欠けるという事故のために、切り出し作業を中断した様子を窺うことができる。欠損後に取り繕おうとした痕跡は全くなく、この切り出し対象物にとっては「全長」が重要な要素であったことを示しているものと考えられる。なおこの部分は露岩の分割面を利用して切り出す輪郭が決められており、これらの切り出し作業は露岩が現状のように削れた後に行なわれたものであることがわかる。

南面の加工痕（図版18）は、明確なものとしては露岩の分離部の上端に2段の階段状の加工痕、側面に短冊状の加工痕が7つ並ぶものが確認できる。これらは一見すると異なるもののようであるが、実際の切り出し対象物はいずれも長さ110cm、幅20cm、厚さ10~15cmほどの枕木状のもので共通している。階段状を呈する部分では露岩の分割面を利用して垂直方向に複数枚切り出し、短冊状の部分では露岩の側面で1枚ずつ横に切り出していったものであろう。なお、この部分では東端の1枚について作業が中断されている。この加工痕の計測値はさきに述べた西面の長方形の加工痕と共にし、これらの加工痕は全て同様な石材を切り出す目的の元で残されたものであろう。なお、昨年度調査時には特に注意していなかったが、あらためて露岩3を観察してみるとこれらの加工痕と類似する部分が存在し、この枕木状の石材は本遺跡における一般的な切り出し石材の一つであったことが窺われる。

この南面については、分離部の東半が露岩本体に残る分割面の形状と大きく異なり、かつて存在したはずの上半部が失われている点が注意される。周囲にはこの部分が崩落した痕跡はなく、またその上面が平坦になっていることを考えると、現状では明確な加工痕はないもののこの部分においても石材の切り出しが行なわれていた可能性が高い。

#### 類似石材の利用例について

昨年度調査時に黒川地区で聞き取りを行った際には、この地が石切場であったと認識している人物には出会うことことができなかつた。しかし、今回新たに黒川地区の大工・篠野辰雄氏から有力な情報を得ることができた。それによると、石切場の話は聞いたことがある、そう古い話ではないのではないか、七輪を作っていたらしい、自分は大工だから知っているが一般の人は知らないのではないか、とのことであった。また今回確認した枕木状の石材については「上藏の基礎ではないか」とのご意見を頂くことができた。

こうした石材の利用例を探るため、近隣の集落を探索した。その結果、麓の黒川地区では過去の道路拡幅の際に大部分の建物が移転しており、その際に多くの部材が廃棄されたとのことで確認はできなかつたが、隣接する閑谷地区・五位尾地区において本遺跡の露岩と類似する石材の利用例を見出すことができた（図版19の5~8）。枕木状のものは土蔵や民家の布基礎や石段、不定形のものは玉石基礎、円筒形のものは井戸側として利用されている。このうち井戸側については内部がかなり深く、直径の同じ部材を縱に重ねて長さを稼いでいた。このことは、本遺跡で見られる円筒形石材の「規格性」と関わるものであろう。また高所のため確認はできなかつたが、土蔵の置屋根の土台（猫石）にも利用されているようである。

現物の突き合わせをしたわけではないため断言はできないが、肉眼上本遺跡の露岩と同一石材であると判断できるものも存在する。しかし現地で簡単な聞き取り調査を行なったところ、これらの石材が黒川のものであるという話は聞いたことがないそうで、五位尾地区では「釈迦寺から山を越えて運んできたものと聞いている」とのことであった。本遺跡で見られる露岩は、「I 遺跡の環境」でも触れたように福平火碎岩層に由来するものと考えられるが、この層は富山県東部の白岩川以東に広く分布しているため、現状ではこれらの石材を本遺跡のものと関連付けることは困難である。

なお、上市町内においてはこれまで須山地区山中の石切場がよく知られていた。ここでの切石は大岩山日石寺の磨崖佛が刻まれている大岩凝灰岩層で、福平火碎岩層と比してより緻密で硬い。また火にも強いことから、カマドやコタツとして大正末期ごろまで富山・滑川へと移出されていたものと言われている。こうした比較的広域に流通していた「良質」石材の陰で、福平火碎岩層のような質の落ちる石材を用いた小規模な石切が各所で行なわれ、近隣集落で適

宜利用されていた可能性がある。本遺跡の石切についてもこうした背景が想定できるが、これを裏付けるような資料は今のところなく、詳細については不明と言わざるを得ない。

## 2. 遺 物 (第13図・図版20)

今回の調査では、第11トレンチ及びその付近において珠洲3点・磁器1点、第10トレンチ南側の斜面で越中瀬戸1点の計5点の遺物を得た。調査面積の割にはごく少量ではあるが、このような山中ににおいて中世に遡る遺物が出土したことは重要である。以下にそれぞれの概要を述べる。

第13図1～3は珠洲である。いずれも第6トレンチから出土したものであるが、2・3についてはトレンチ掘削前に表土より採取したものであり、厳密には表面採集資料である。なお、これらは胎土や焼成などが多く共通しており、同一個体であるものと考えられる。1は壺の口縁部破片である。頸基部は丸棒状器具による強い撫で回して明瞭にくびれ、口縁部は板状の器具により外反されて端部には稜が立つ。この口縁部のつくりから吉岡康輔氏による珠洲縦年N<sub>2</sub>期（法住寺第3号窯段階）、14世紀代の製品であるものと考えた。胎土は密で海面骨針を多く含み、焼成は良好である。2・3はいずれも1と同一個体の体部破片である。比較的薄手で、外面は3cmあたり9条の右下がりの平行叩きが施されている。また内面は当其痕が丁寧に撫で消されている。なお、3は内面からの強い衝撃によってはじけ飛んだ小破片である。

4は磁器の碗である。口径は約10cmを測る。内外面に白色の釉が施されているが、内面の一部では釉がまわりきらず無釉となる部分がわずかに認められる。内面には青色で施された模様の一部が確認できるが、意匠は不明である。なお外側には被熱によるハジケが認められる。特徴がなく時期は不明であるが、近世あるいは近代のものであろう。

5は越中瀬戸の丸碗である。口径は約8cmを測り、内外面に黒色の鉄釉がかかる。近世のものであろう。

6は本遺跡出土品ではなく、開谷地区で露岩類似石材の探査中に民家の軒先で採取したものである。珠洲壺の体部下半部の破片である。外面には3cmあたり6条と非常に粗い平行叩きが施されているが、全体的に摩滅しており凹凸が不明瞭となっている。内面は磨きこまれたように滑らかで、長年の使用を経たものであることが窺われる。叩き目の粗さから珠洲IV～V期（14世紀～15世紀前半）の製品と考えられるが、詳細は不明である。なお付言すると、この珠洲を採取した民家でも露岩類似石材の利用を確認している。

## V まとめ

前述の調査結果とそこから得られた見解を整理し、本報告のまとめに代えたい。

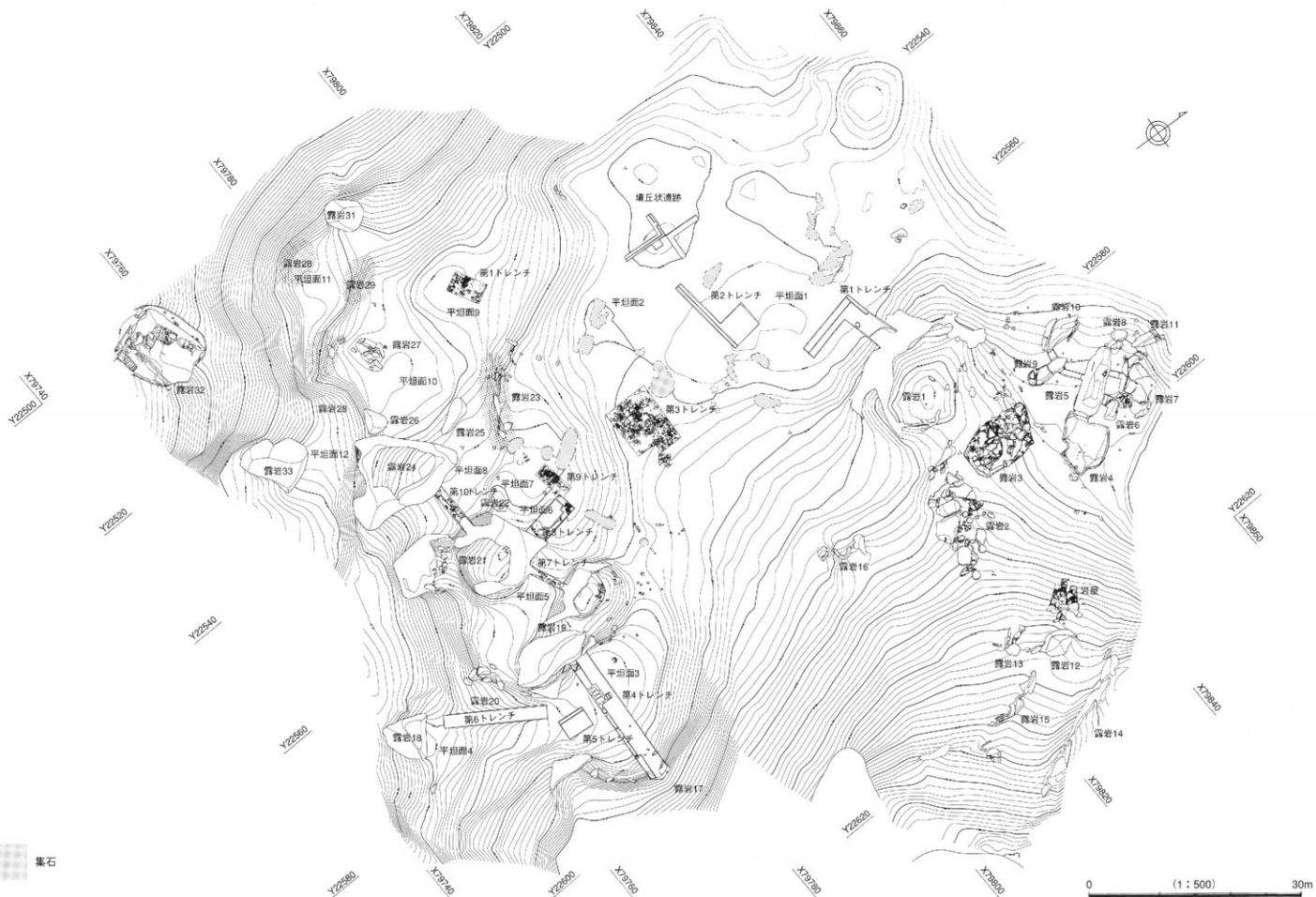
1. 黒川岸天遺跡は黒川地区東端の山中に位置し、弘法大師ゆかりの地・護摩堂地区との境界にあたる。遺跡は標高約150～200mの山腹に立地し、林立する巨岩群とそれらの間に広がる平坦面群からなる。
2. 今年度の調査は、昨年度調査区の南側に林立する露岩の間に存在する比較的小規模な平坦面を対象にして行なった。その範囲はその範囲は世界測地系の平面直角座標X79740～79810、Y22500～22600にあたり、面積は約5,000m<sup>2</sup>を測る。
3. 平坦面の調査では昨年度調査同様、建物跡などの明確な遺構は検出できなかった。しかし、平坦面5・6・7では現状の平坦面が人為的に造成されたものであることが判明した。また平坦面9では、かつてこの場所に高い壇状の地形が構築されていたであろうことが窺われた。出土遺物がなく根柢に乏しいが、これは単なる生活痕跡や石切関連施設であったものとは考えにくく、何らかの宗教施設が上部に存在していた、あるいはこの地形そのも

のが塚のようなものであった可能性が高いものと考えた。

4. 今年度の調査では露岩の個別の検出作業は行なっていないが、現況の観察から今年度調査区内の露岩群のうち露岩19・21・22・27・30の5つについて、人為的加工痕が存在する可能性が高いものと考えた。また、台風の影響で露出した露岩32について緊急に検出作業を行なった結果、北面・西面・南面の3面にわたって概ね円筒形・方形・長方形の石材を切り出した痕跡を確認した。
5. 露岩から切り出された石材の利用例を探るため、近隣の集落を探索した。その結果、黒川地区に隣接する開谷地区・五位尾地区において本遺跡の露岩と類似する石材が主に建築部材として利用されていることが明らかとなった。本遺跡のものと直結するものではないが、「須山の切石」のような比較的広域に流通していた「良質」石材の陰で、これらのような質の落ちる石材を用いた小規模な石切と近隣での利用が各所で行なわれていた可能性があり、本遺跡の石切についてもこうした背景を想定した。ただしこれを裏付けるような資料は今のところなく、詳細については不明である。
7. 今回の調査では、少量であるが陶磁器類が出土した。これには3点の珠洲（同一個体）が含まれており、これによって当地の利用が14世紀代にまで遡ることが明らかとなった。本遺跡に残された活動痕跡のどの部分に関わるものかは不明であるが、この山中に中世の遺物が存在すること自体が重要な意味を持つものと考えられる。なお、14世紀代は麓の中世宗教遺跡群では活動痕跡が希薄になる時期にあたり、活発な活動痕跡が認められるのは日枝神社裏遺跡のみである。この点で日枝神社裏遺跡は遺跡群中においてやや異質な流れの中にあるものと考えられている。また「日枝神社」は修験道との関わりが深いものとされており、今回出土した珠洲の年代を積極的に評価するならば、黒川岸天遺跡もその流れの中で残されたものと考えることが可能であろう。ただし現状では明確な中世の遺構が未検出であること、遺物の絶対数が圧倒的に少ないとから根拠に乏しいため、引き続き調査・検討を行なっていく必要がある。

## 引用・参考文献

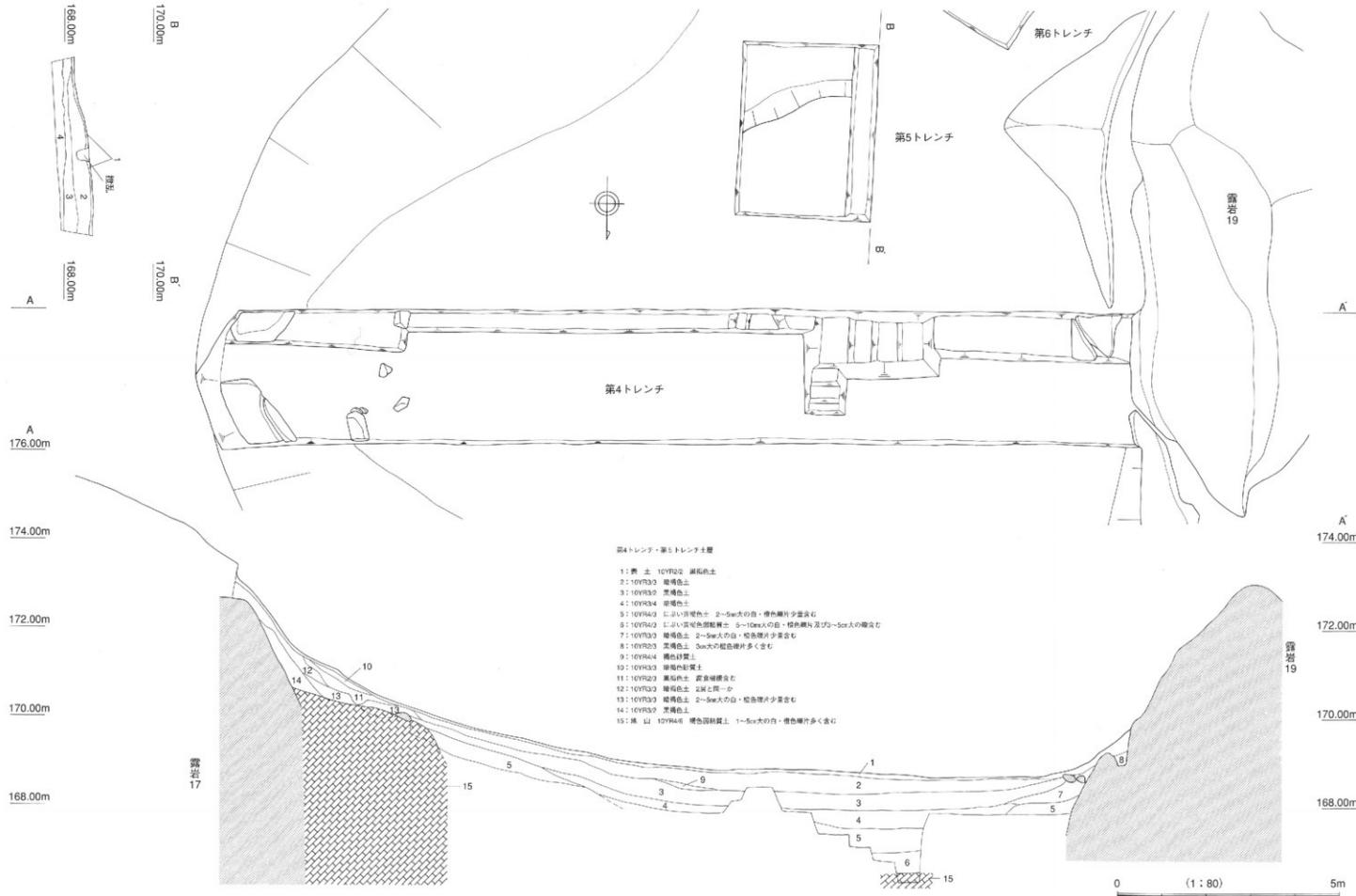
- ア 越中瀬戸焼発祥四百年記念顕彰会実行委員会 1988 『越中瀬戸焼祥四百年記念誌』  
大橋康二 1993 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55、ニュー・サイエンス社  
カ 上市町 1970 『上市町誌』  
上市町教育委員会 1995 『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査概報』  
上市町教育委員会 1997 『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査第2次調査概報』  
上市町教育委員会 1998 『富山県上市町黒川上山古墓群第3次調査概報』  
上市町教育委員会 1999 『富山県上市町黒川上山古墓群第4次調査概報』  
上市町教育委員会 2000 『富山県上市町黒川上山古墓群第5次調査概報』  
上市町教育委員会 2001 『富山県上市町黒川上山古墓群第6次調査概報』  
上市町教育委員会 2002 『富山県上市町黒川上山古墓群第7次調査概報』  
上市町教育委員会 2003 『富山県上市町黒川上山古墓群第8次調査概報』  
上市町教育委員会 2004 『富山県上市町黒川上山古墓群第9次調査概報』  
サ 静岡県湖西市教育委員会 1997 『大知波岬廃寺跡確認調査報告書』  
タ 立山町教育委員会 1994 『芦嶺寺宝堂遺跡－立山信仰の考古学的研究－』  
立山町教育委員会 1997 『立山雄山山頂遺跡－雄山神社本社殿建替事業に伴う調査－』  
富山県教育委員会 2003 『富山の土蔵－富山県伝統的建築技術調査報告書－』  
富山地学会編 1986 『富山県の地形・地質－自然環境管理計画策定のための調査－』  
ハ 福光町・医王山文化調査委員会 1993 『医王山文化調査報告書 医王は語る』  
北陸中世土器研究会 1994 『中世北陸の寺院と墓地』 第7回北陸中世土器研究会資料



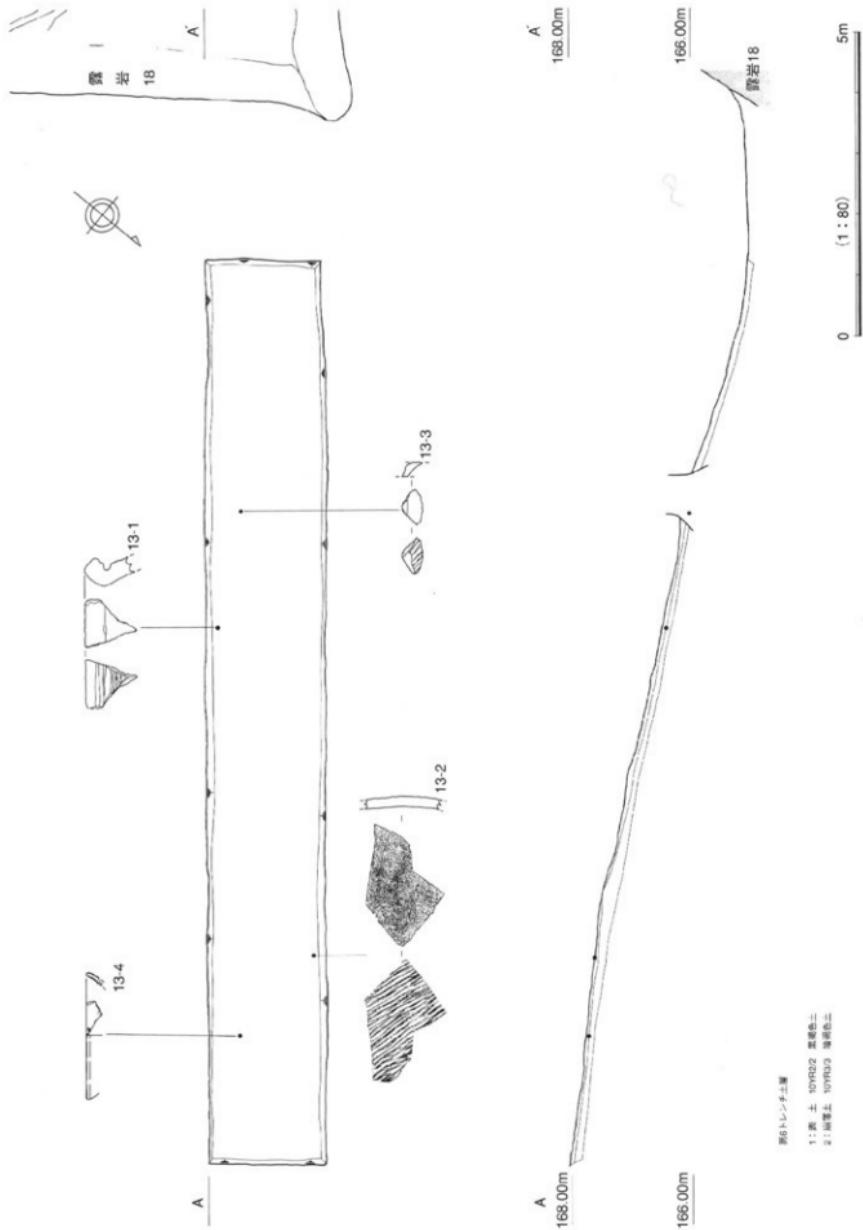
第3図 遺構全体図 (縮尺 1/500)



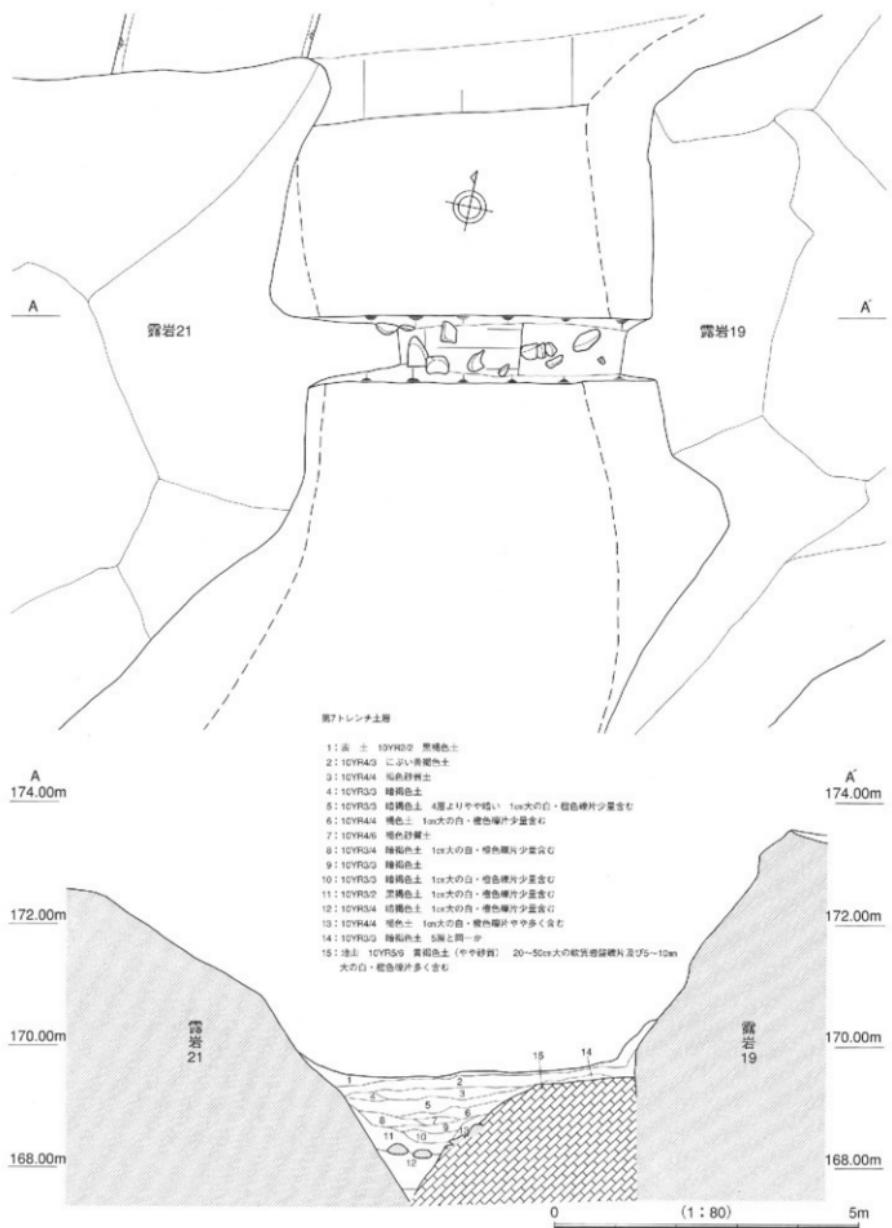
第4図 今年度調査対象地区全体図 (縮尺 1/250)



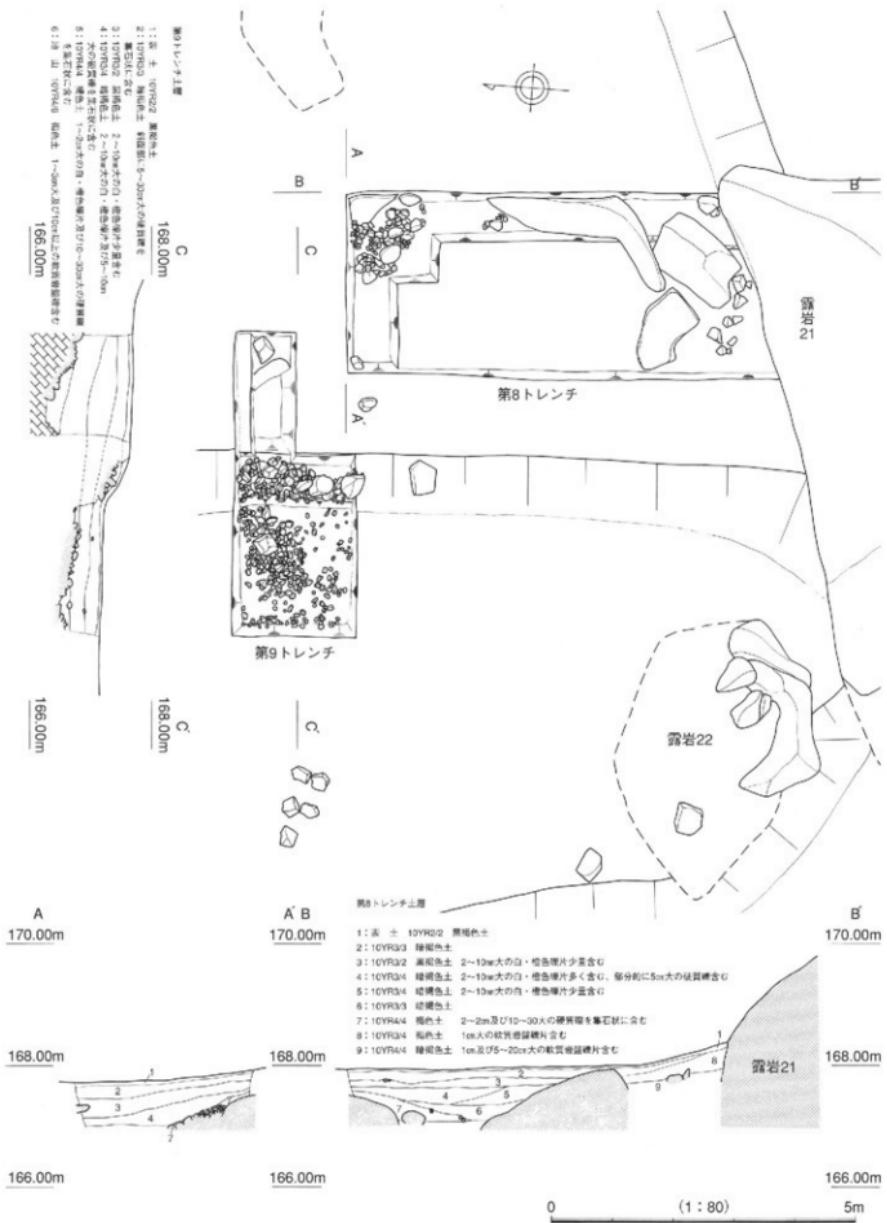
第5図 第4・5トレンチ実測図（縮尺 1/80）



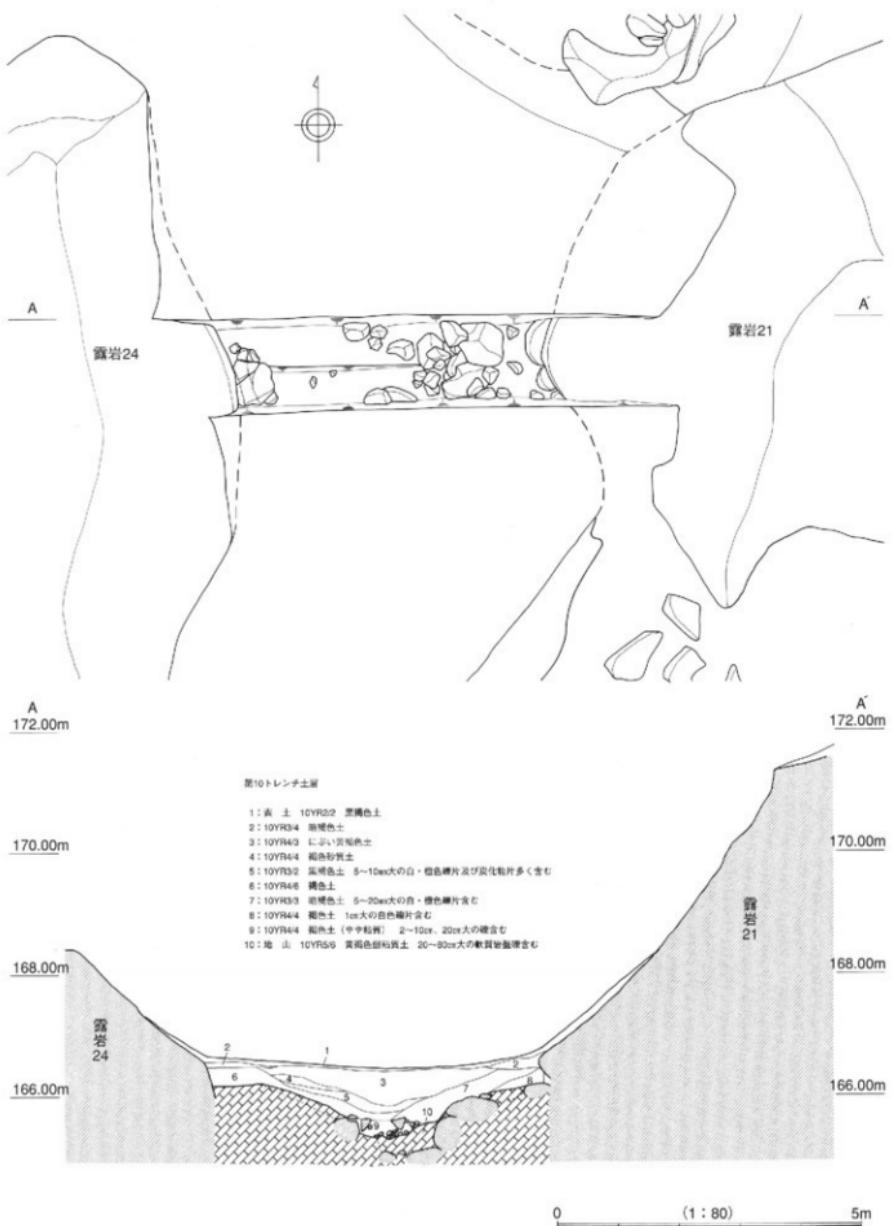
第6図 第6トレンチ実測図(縮尺 1/80)



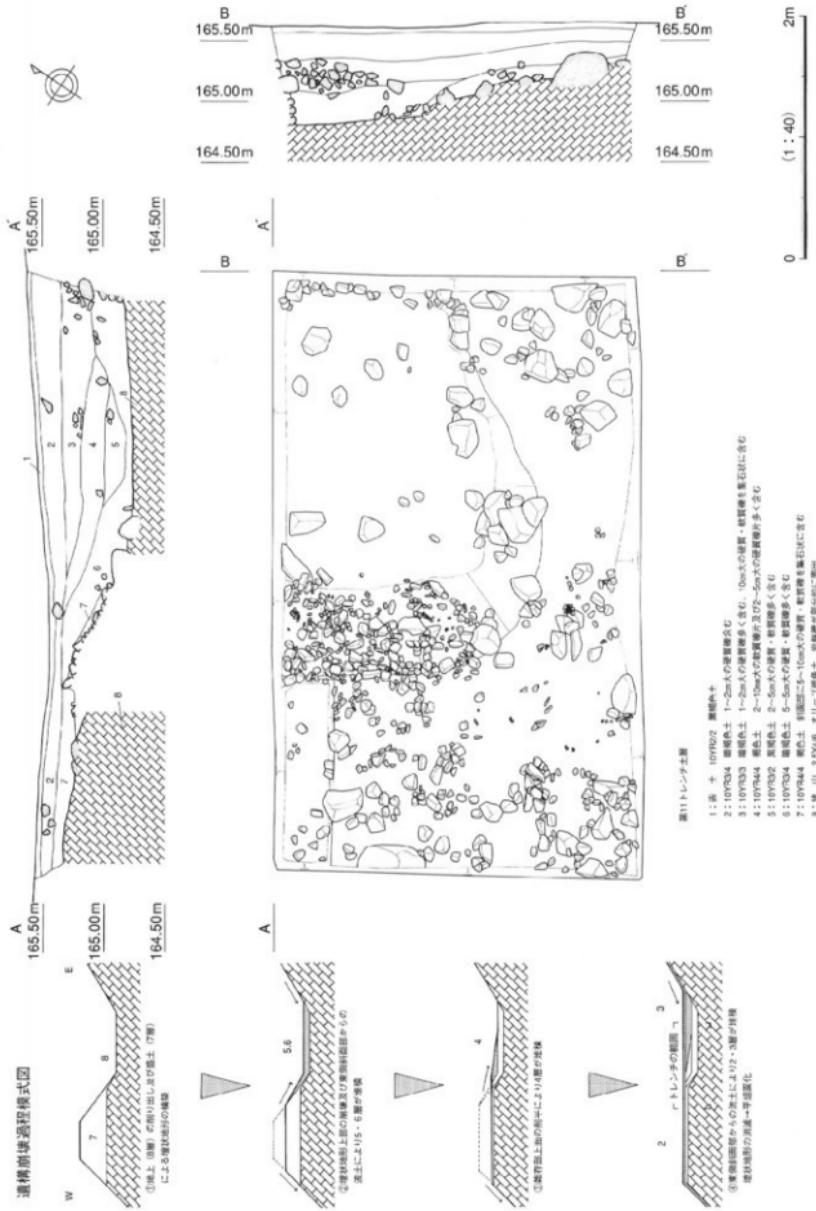
第7図 第7トレンチ実測図 (縮尺 1/80)



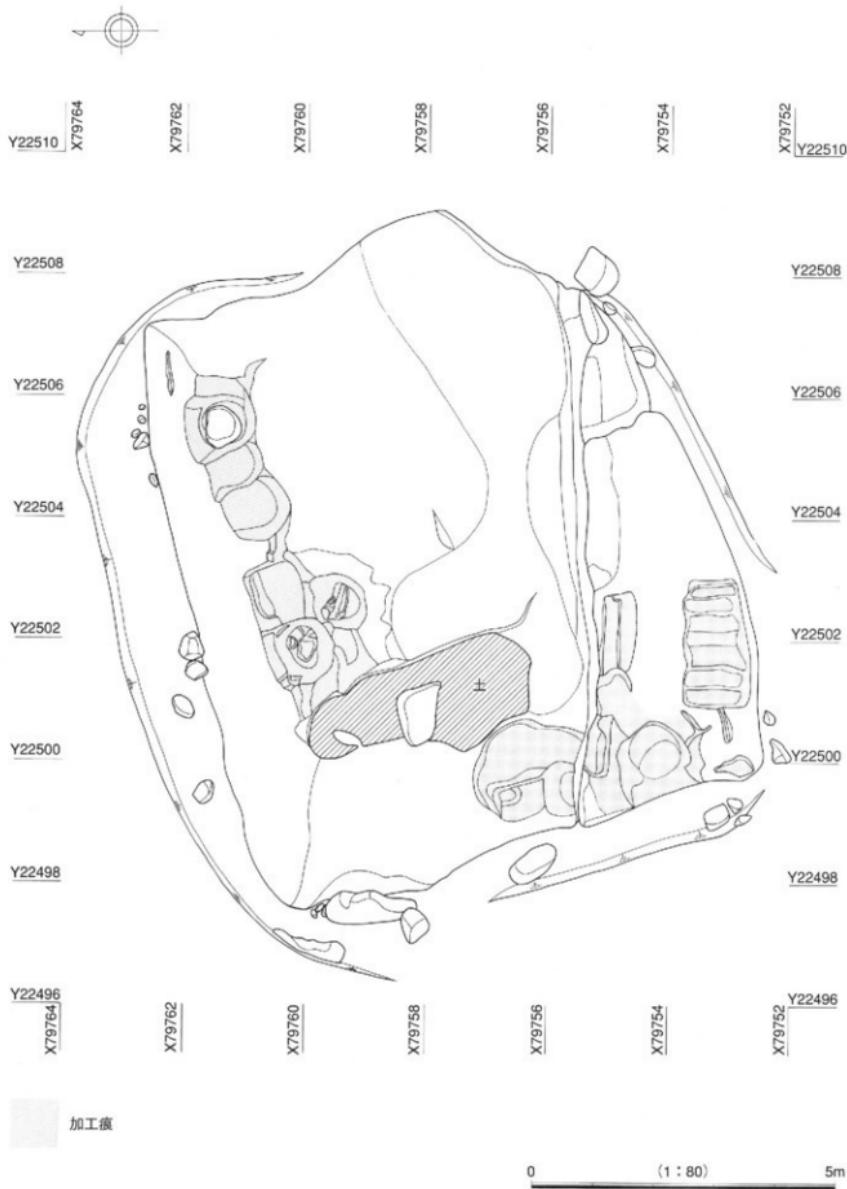
第8図 第8・9トレーニチ実測図(縮尺 1/80)



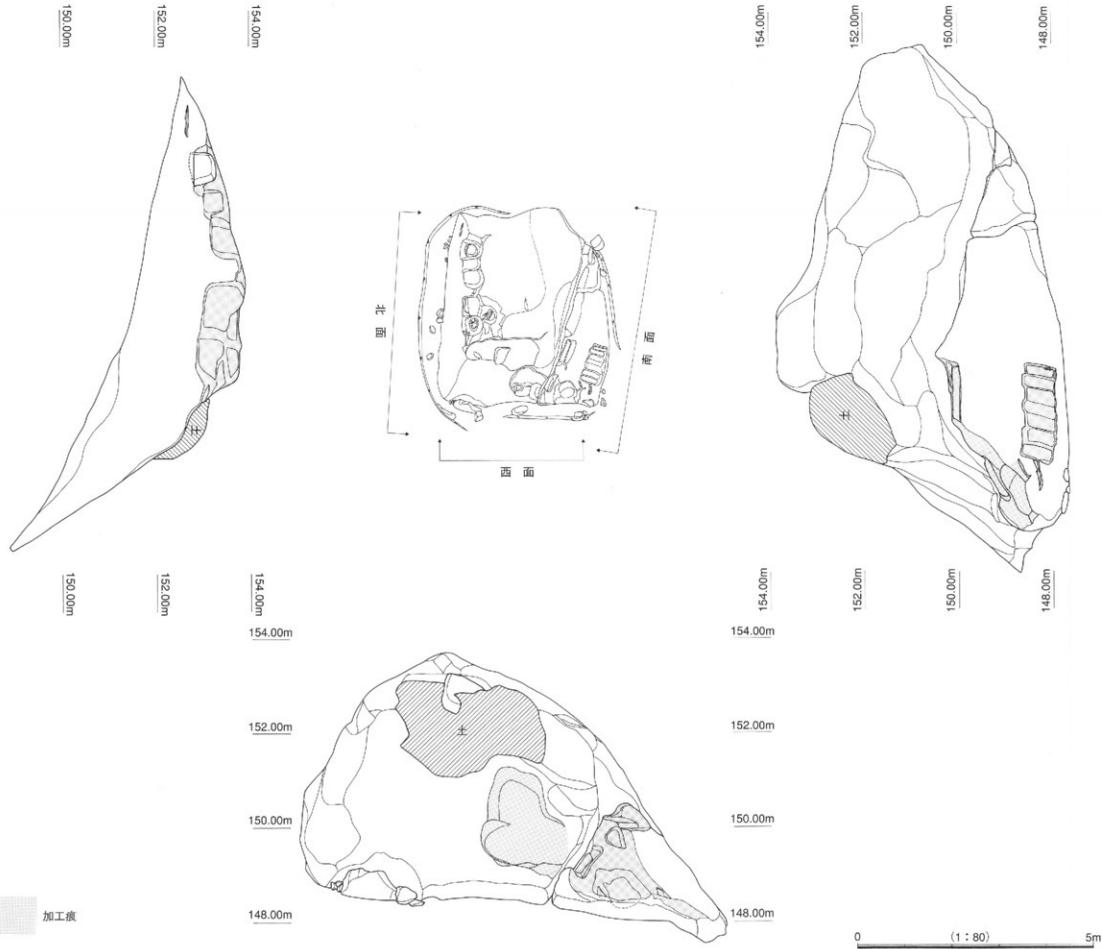
第9図 第10トレンチ実測図 (縮尺 1/80)



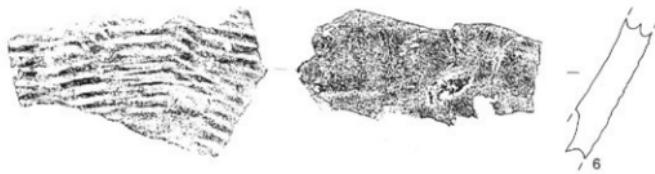
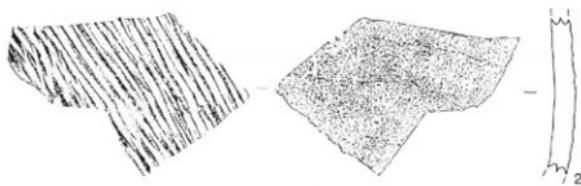
第10図 第11トレシチ実測図(縮尺 1/40)



第11図 露岩32実測図(平面図)(縮尺 1/80)



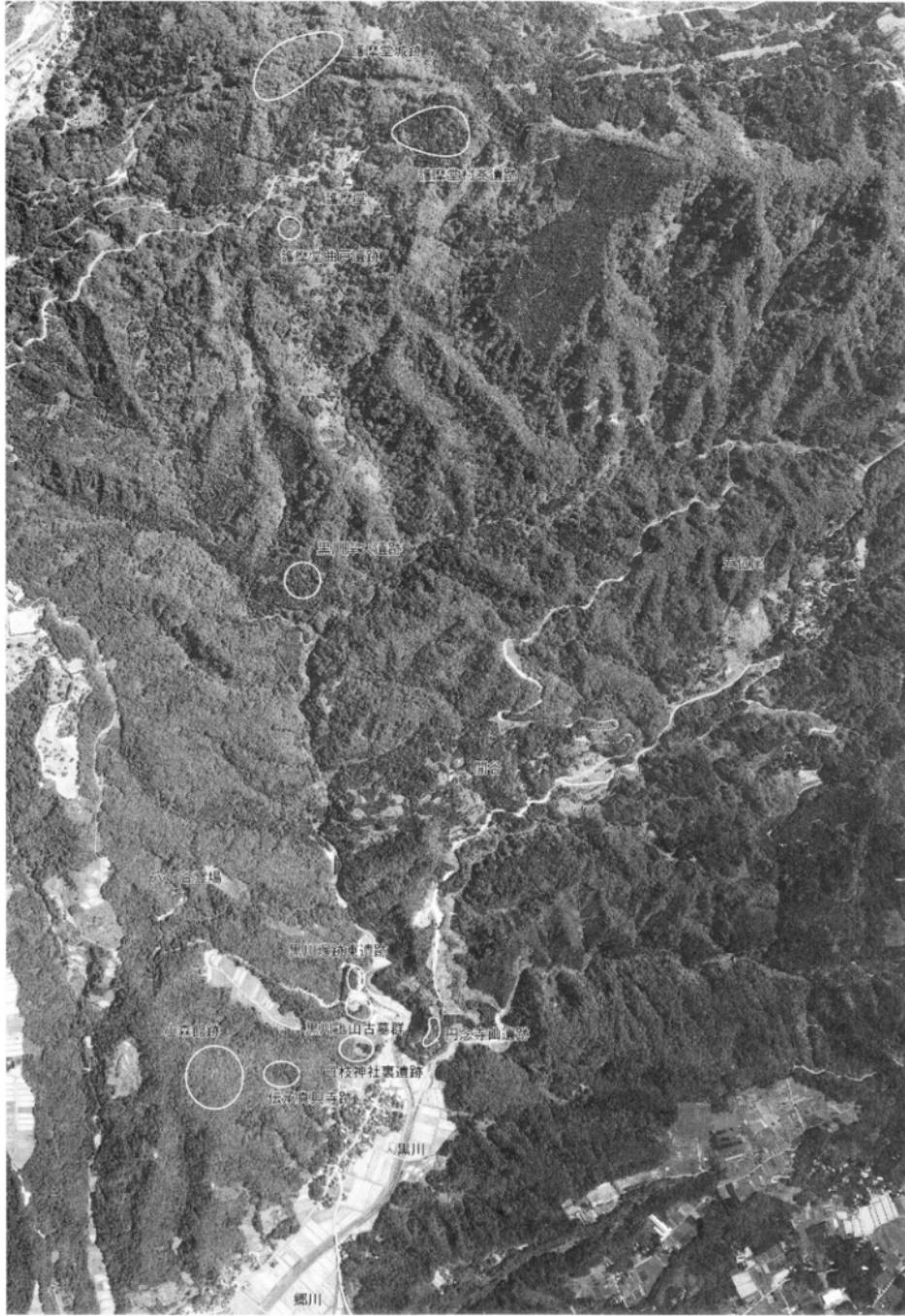
第12図 露岩32実測図(立面図) (縮尺 1/800)



0 (1 : 2) 10cm

第13図 遺物実測図 (縮尺 1/2)

1-4: 第6トレンチ, 5: 表面採集, 6: 開谷地内採取

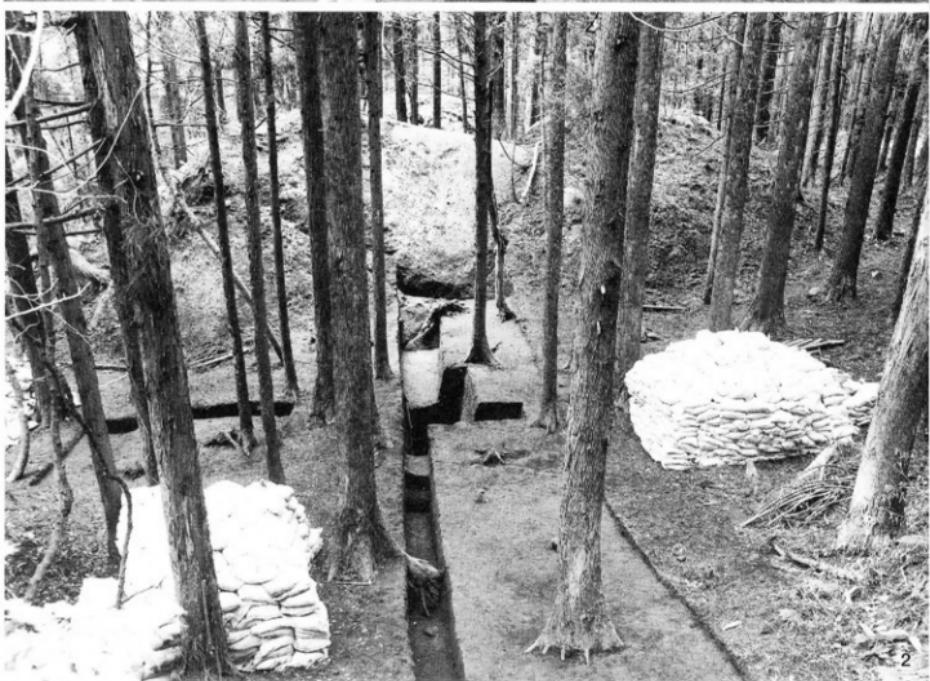


図版1 周辺航空写真(平成8年撮影、左が北)



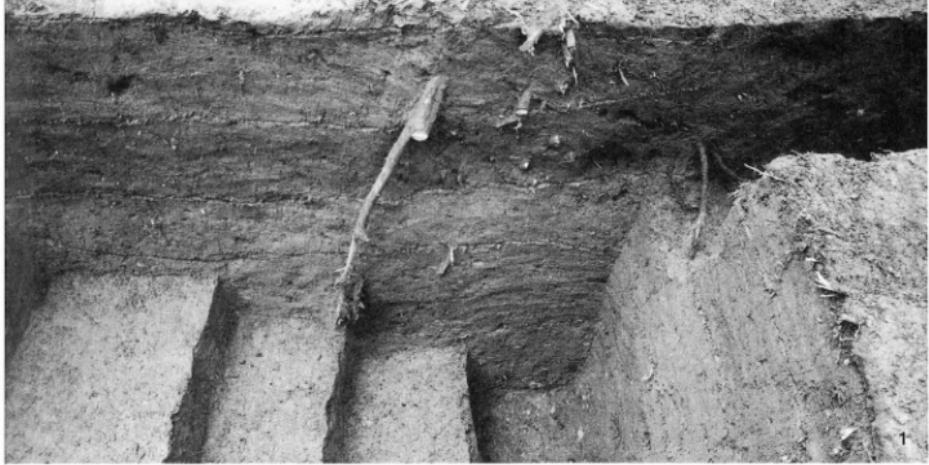
図版2 遺構写真

1:遺跡遠景(北より)、2:平坦面3(北より)、3:同(南より)



図版3 遺構写真

1:第4トレンチ全景(西より)。2:同(東より)



図版4 遺構写真

1:第4トレンチ土層堆積状況(北より)、2:同(南西より)、3:同(北西より)

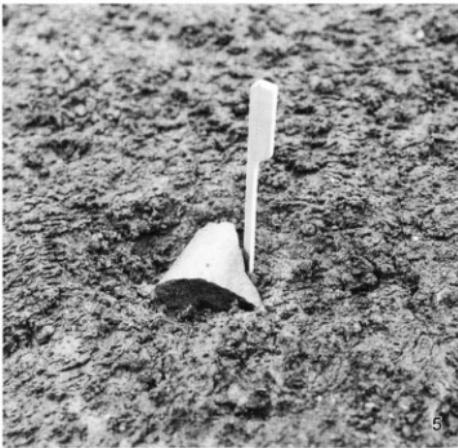
4-5:第4トレンチ周辺の二次加工痕のある石材



図版 5 遺構写真

1: 第5トレーニチ全景(南西より)、2: 同土層堆積西状況(西より)

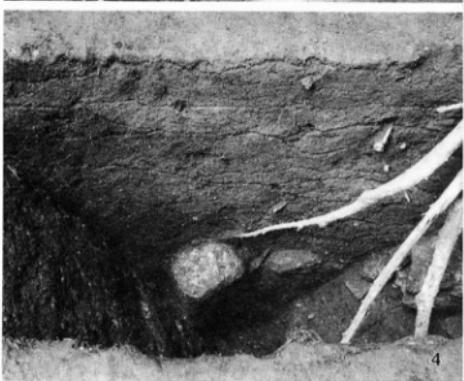
3: 露岩19(東より)、4: 露岩20(南東より)



図版 6 遺構写真

1: 平坦面4・露岩18(北より), 2: 第6トレンチ全景(北東より)

3: 同全景(南西より), 4・5: 同遺物出土状況



図版7 遺構写真

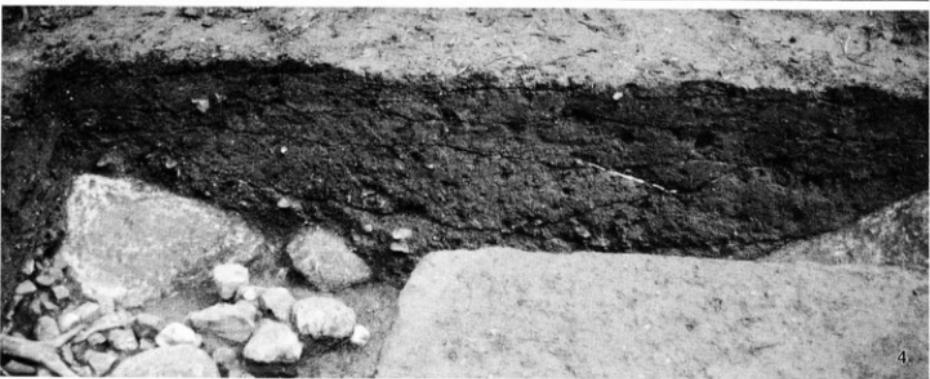
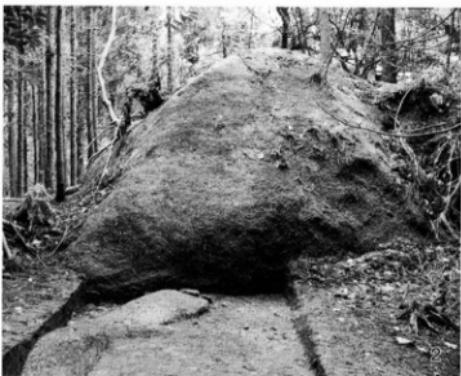
1: 平坦面5(南より)、2: 第7トレーニチ全景(東より)  
3: 同土層堆積状況(南西より)、4: 同土層堆積状況(南より)



図版8 遺構写真

1:平坦面6・7(北西より)、2:同(南東より) 3:平坦面6背後の集石(西より)

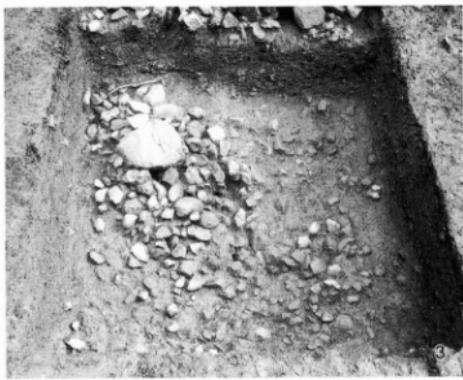
3:露岩22上部(北より)、5:平坦面7・露岩23(南より)



図版9 遺構写真

1: 第8トレチ全景(南より)、2: 第8トレチ、露岩21(北より)

3: 第8トレチ集石(南より)、4: 同土層堆積状況(西より)



図版10 遺構写真

1: 第9トレンチ全景(西より)、2: 同上層集石(西より)、3: 同下層集石(西より)

4: 同土層堆積状況(南西より)、5: 同土層堆積状況(北西より)